



Official journal of the
Japanese Society of Psychiatry and Neurology

Psychiatry and Clinical Neurosciences

PCN だより Vol. 72, No. 10

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 72 (10) は、PCN Frontier Review が1本、Review Article が1本、Regular Article が2本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を、海外の論文はPCN編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。また併せて、PCN Field Editor による論文の意義についてのコメントを紹介する。

PCN Frontier Review

Evaluation method regarding the effect of psychotropic drugs on driving performance : A literature review

*M. Iwata**, *K. Iwamoto*, *N. Kawano*, *T. Kawae* and *N. Ozaki*

*Department of Psychiatry, Nagoya University, Graduate School of Medicine, Nagoya, Japan

向精神薬が運転技能に与える影響に関する評価方法 : 文献レビュー

精神疾患を有する患者を含めて、多くの人々にとって自動車運転は不可欠であるが、向精神薬が運転技能に与える影響は明確ではなく、科学的検証が必要である。本研究の目的は、薬物が運転技能に与える影響に関する有効な評価方法を開発するために文献的レビューを行うことであった。PubMedで2セットの用語を使い、文献検索を行った。1セット目は向精神薬

に関連する用語、もう1セットは運転テストに関連する用語を用いた。レビューとケーススタディーを除外し、他サイトで見つけた文献を追加し、合計121件の関連報告が見つかった。文献に記載されている実験は、実車試験(ORT)とドライビングシミュレータ試験(DS)に大別された。ORTの高速道路走行試験は運転技能を評価するために最もよく使用されるが、徐々にDSがその安全性と低コスト性のために一般的になってきている。また、アルコールの評価方法の妥当性も検証すべきであるが、特にDSにおいては検証実験がほとんどないことがわかった。各DSのシナリオと評価指標が異なるため、DS研究の結果を直接比較することも困難であった。横方向位置の標準偏差(SDLP)を除いて、評価指標は十分に検証されていなかった。ORTはゴールドスタンダードであるが、DSは運転技能の評価において、ますます重要な役割を果たすようになってきている。質の高いエビデンスを蓄積するためには、アルコールによる妥当性検証に加え、DSの信頼性を確立していく必要がある。

■ Field Editor からのコメント

精神疾患患者にとって、自動車の運転ができるかどうかは、生活上死活問題です。向精神薬の添付文書の多くに、服薬中は運転してはいけないという文言があり、規制当局にこれを外してもらおうと交渉するには、薬が運転に影響しないというエビデンスが必要となります。しかし、それをいったいどのように研究すればよいのが問題です。この論文は、向精神薬が運転能力に与える影響を評価する方法として、実際に道で運転する、運転シミュレータを使う、といった方法論について系統的に述べた総説です。こうした研究により得られた、各々の薬が運転に及ぼす影響についての知見もまとめられており、大変有用な総説となっています。

Review Article

Preventing Wernicke's encephalopathy in anorexia nervosa : A systematic review

*E. Oudman**, *J. W. Wijnia*, *M. J. Oey*, *M. J. v. Dam* and *A. Postma*

*1. Experimental Psychology, Helmholtz Institute, Utrecht University, Utrecht, 2. Korsakoff Center Slingsdael, Lelie Care Group, Rotterdam, The Netherlands

神経性やせ症におけるウェルニッケ脳症の予防：システマティックレビュー

神経性やせ症 (AN) は、世界で 290 万人が罹患している頻度の高い摂食障害である。バランスのとれた食事を摂らないこと、あるいは絶食することから重度のビタミン B₁ 摂取不足を経て神経学的合併症を惹起しうるが、ウェルニッケ脳症 (WE) の正確な徴候および症状は明らかにされていない。本稿は、AN 患者における WE の徴候および症状について検討することを目的とした。MEDLINE, EMBASE, Scopus, PiCarta から、言語に関係なく AN 発症後の WE に関する症例の記述すべてを検索した。WE 12 例を検討したところ、AN 発症後の WE は、いまだに比較的稀な精神神経疾患であることが示唆された。WE は、精神状態変化、眼徴候、運動失調の三徴により特徴づけられる。アルコール依存症では、この三徴が症例の 16% に存在するが、AN 12 例中 8 例が三徴すべてを呈し

た。重要なことに、患者はしばしば、めまい、複視および WE と因果関係があるリフィーディング症候群を伴い、既報の記載より複雑な三徴を示した。AN に三徴すべてと付加的な総合的症状を併発すると、WE の徴候および症状の認識が遅延した。複雑なのは、チアミン欠乏の症状と WE での症状間の重複である。特に、急速な体重減少を示す患者は WE を発症しやすい。AN などの摂食障害は WE をきたしうる。AN 患者には、予防的なチアミンの検査および投与が妥当であり、WE 疑い例には、チアミンの適切な非経口投与による補給が必要である。

■ Field Editor からのコメント

神経性やせ症におけるウェルニッケ脳症についての総説です。アルコール依存症でのウェルニッケ脳症に比べ、神経性やせ症でウェルニッケ脳症と診断された症例は、報告が非常に少ないのですが、診断時に精神状態変化、眼徴候、運動失調の三徴がそろっている症例が多いことから、ウェルニッケ脳症が重症になるまで見逃されている場合が多いことが示唆されています。摂食障害におけるウェルニッケ脳症の早期発見や予防的措置の重要性を示唆する臨床上大変重要な論文といえるでしょう。

Regular Article

Development and validation of the 25-item Hikikomori Questionnaire (HQ-25)

*A. R. Teo**, *J. I. Chen*, *H. Kubo*, *R. Katsuki*, *M. Sato-Kasai*, *N. Shimokawa*, *K. Hayakawa*, *W. Umene-Nakano*, *J. E. Aikens*, *S. Kanba* and *T. A. Kato*

*1. VA Portland Health Care System, HSR & D Center to Improve Veteran Involvement in Care, Portland, 2. Department of Psychiatry, Oregon Health & Science University, Portland, 3. School of Public Health, Oregon Health & Science University and Portland State University, Portland, USA

25 項目ひきこもり質問票 (HQ-25) の開発と妥当性検証

【目的】社会的ひきこもり (hikikomori) は深刻な社会的回避の形態の 1 つであり、精神保健における喫緊

の課題であるが、妥当性のある評価ツールは現在のところ存在しない。本研究の目的は、ひきこもりの自己報告式尺度を開発し、精神測定特性と診断精度を評価することであった。【方法】臨床およびコミュニティの集団から399名の被験者が尺度に回答した。精神測定特性は因子分析を用いて評価され、診断精度は半構造化診断面接と比較された。【結果】25項目ひきこもり質問票(HQ-25)は、「社会性」「孤立」「情緒的支援」の3つの下位尺度より構成されていた。内部整合性、再検査信頼性、収束の妥当性はすべて満足しうる結果であった。曲線下面積は0.86(95%信頼区間0.80~0.92)であった。カットオフ値は100点満点中42点であり、感度94%、特異度61%、陽性適中率17%であった。【結論】HQ-25は、日本人成人の初回サンプルにおいて、安定した精神測定特性と診断精度を有していた。精神測定特性とひきこもりの臨床評価を支持する能力があるかを評価するための追加研究が必要である。

■ Field Editor からのコメント

「ひきこもり」が精神保健上重要な問題であることは言うまでもありませんが、いまだに妥当性の確認された評価尺度はありませんでした。この研究は、ひきこもりのリスクを評価するための、25項目ひきこもり質問票(HQ-25)の妥当性を検証したものであり、今後のひきこもり研究に非常に重要な役割を果たす論文になることが期待されます。

Regular Article

Antipsychotic drugs and risk of newly diagnosed tuberculosis in schizophrenia

H. -C. Liu*, G. C. -L. Hung, S. -Y. Yang, Y. -T. Liao, C. -H. Pan, C. -C. Chen and C. -J. Kuo

*1. Taipei City Psychiatric Center, Taipei City Hospital, Taipei, 2. Department of Psychiatry, School of Medicine, College of Medicine, Taipei Medical University, Taipei, 3. Psychiatric Research Center, Taipei Medical University Hospital, Taipei, Taiwan

統合失調症における抗精神病薬と結核の新規罹患リスク

【目的】統合失調症患者は、一般集団に比べて結核の罹患率が高い。また、統合失調症患者の抗精神病薬

使用と結核リスクとの関連性については、現在のところ、限られた情報しかない。本探索的研究では、抗精神病薬治療中の統合失調症患者にみられる結核リスクを評価した。【方法】台湾の国民健康保険研究データベース(National Health Insurance Research Database)より抽出した全国規模の統合失調症患者コホート(n=32,399)において、精神科への初回入院以降に、新たに結核と診断された患者284例を特定した。リスクセットサンプリングに基づき、各症例に対して、10例以下の年齢および性別を適合させた対照をコホートより無作為に選択した。抗精神病薬への曝露については、種類および規定された1日投与量により分類した。多変量解析を用いて、個々の抗精神病薬の結核リスクを調査し、感度分析では傾向スコアを用いてあらゆる関連の妥当性を分析した。【結果】共変数を調整した結果、検討した抗精神病薬のうち結核リスクと関連していたのは、クロザピンの現時点での使用のみであり、63%の増加であった(調整リスク比=1.63, $P=0.014$)。また、この関連に明確な用量依存性はみられなかった。クロザピンに他の抗精神病薬を併用している場合、結核リスクに対する潜在的な相乗作用が認められた(調整リスク比=2.30, $P=0.044$)。【結論】

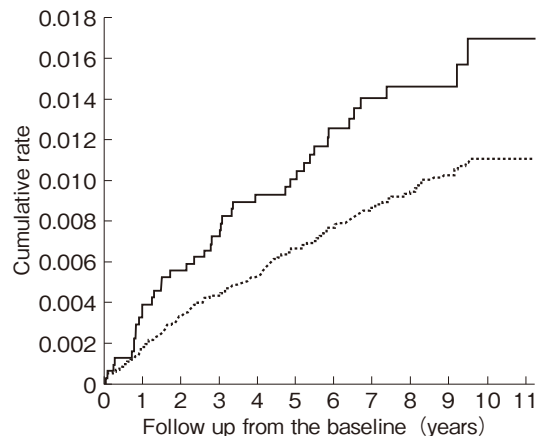


Figure 2 Cumulative incidence of tuberculosis in the cohort with schizophrenia stratified by the use or non-use of clozapine within 180 days before the censor (i.e., the incident tuberculosis, mortality, or the end of the study). (—) Clozapine users. (.....) Non-clozapine users.

(出典：同論文, p.796)

本探索的研究から、特にクロザピンと他の抗精神病薬を併用している場合、クロザピンが結核リスクをもたらす可能性が示唆された。この関連を検証するためには、今後の研究が必要である。

■ ■ Field Editor からのコメント

統合失調症患者における結核の罹患率は一般人口より高いことが知られています。本研究は台湾の国民健康保険データ (32,399 件) を用いて、抗精神病薬の種類と結核罹患率の関連を調査し、クロザピンの使用が結核罹患率と有意に関連することを明らかにしています。治療抵抗性統合失調症に対するクロザピンの使用が進みつつあるなかで、非常に重要な意義をもつ論文といえるでしょう。

■ Psychiatry and Clinical Neurosciences

Vol. 73, No. 1-2 表紙の作品解説

無数の線が絡まっている。線は、黒とそれ以外（つまりさまざまな色）とに大別される。黒い線は太いものと細いものに、それ以外の線は青、赤といった各色に区別される。太い黒い線は三次元的にねじれながら進んでいることもあって、一番スピードと動きが感じられるように思える。部分的には、文字になったり、人の形を形成しそうになったりするけれども、なにか固定的な意味をつくりだすことはない。そして、見ているうちに、黒の細い線や、あるいは飛び交うような青の線に、注意を奪われていることに気づく。と同時に、無数の線が織りなす厚みに、あるいは複雑な深さに心を奪われていることだろう。さらに興味深いのは、絵の周囲に、細い線だけのエリアが残されていること。この処理により、色を施された部分が、これはフィクションであるという意識に基づいて生み出された空間に違いないと感じられるようになる。描き方はホットだが、姿勢としてはクールな抽象画だ。

作家の本田は、実際には野菜など具体的な事物をモチーフにした作品も描くし、マネキンなどの立体に描くこともある。幼少時より絵を描くのが得意で、高校卒業と同時に施設で創作活動に取り組むようになった。IQはかなり高く診断はアスペルガー症候群。特に立体視に優れている。制作時には筆を1本しか使わず、色数にかかわらず制作時に使用するパレットの部位は端の1箇所しか使わない。現在は、毎日4時間、アトリエで制作している。

(保坂健二郎¹⁾、平野羊嗣²⁾)

1) 東京国立近代美術館, 2) 九州大学大学院医学研究院精神病態医学



タイトル：ムラクモ

作者：本田雅啓

制作年：2017

材料：アクリル絵の具、インク

サイズ：650×527 mm